



三日目追加 HOマリー







大雨というよりは、豪雨と呼べる音で目を覚ました。 ここに来て三日目の朝。 小屋が心配になるほどの雨量だ。

朝なのに部屋の中が暗くて、ろうそくに火を灯した。 雨漏りしていないことを確認し、下へおり、昨晩多めに汲 んでおいた水を沸かす。

その間にスミレの部屋を見に行ったが、床にはなにも置かれていなかった。

おそらく体は拭いてくれているだろう。

――ご飯は、どうだろうか。

私を警戒していたから昨晩毒の話をしたけれど、私だって スミレを信用しきっているわけではない。

けれど、ここで困っている人を見過ごしたら、魔女の使命 など到底こなせないと思った。

「スミレ、起きていますか?」

雨漏りの確認もしたかったため、ノックをして声をかけてみたが返事がない。

眠っているのだろうか。

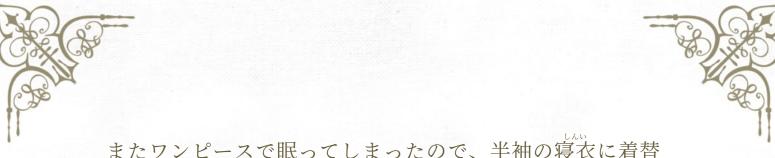
しばらくしたらまた来よう、そう思い、調理台へ戻った。

沸かしたお湯で体を拭く。

少しだけ、教会のお風呂が恋しくなった。







またワンピースで眠ってしまったので、半袖の寝衣に着替 えたあと、調理台で洗濯して干した。

一階の雨漏りも確認したあと、切ったパンにジャムを塗って、ロフトへ戻る。

ロフトにはたくさんの本が置いてあった。

本を読むのはすきだ。

並べられた本の背表紙を見ていくと、物語が書かれた小説から専門分野の本、日記など様々だった。

かつての子どもたちがここでどう過ごしたのか気になって、 手始めに、日記を手に取った。

『一日目。持ってきた本を読んで過ごした。』

『二日目。夜、獣の声が聞こえてきてこわい。本当にこの 小屋で七日間も過ごさないといけないのかな。』

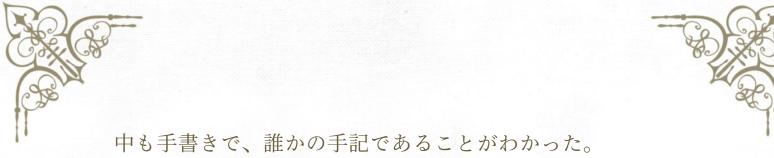
『三日目。魔女になる夢を見た。こわいと思っていた獣と 仲良くなる夢だった。私たちは一緒に遊んで、眠って、と もに過ごした。』

『四日目。また魔女になる夢だ。昨日仲良くなった獣が 襲ってきて、魔法で殺した。あっさりと、できてしまった。 二日目に感じていた恐怖などもはや、なかった。』

ページをめくる手が止まる。 なぜだか続きを読むのがこわくなって、日記を閉じた。

次に、表紙も紙でできたボロボロの本を手に取った。表紙には『魔法について』と手書きで書かれている。





この本によると、二種類の魔法を授かるらしい。 ひとつは、自然に干渉する魔法。 雨を降らせたり、火を起こしたりできる。 もうひとつは、生き物に干渉する魔法。 けがや病気に干渉したり、操ることができる力。 儀式中、自分が授かった魔法が頭の中に浮かんでくるそうだ。

使い方や原理もそのとき頭に入り込んでくる。 そう書いてあるものの、どのような感覚なのかはいまいち 理解できなかった。

――あの日記のように、誰かを傷つける魔法を授かったらどうすればいいんだろう。 歴法されて、表はななななななが、

魔法を扱う者はそれを使って人々を導く。

その魔法が必ずしも良い魔法であるとは限らない。

使命に従った結果、人々を苦しめてしまうことにもなるの だろうか。

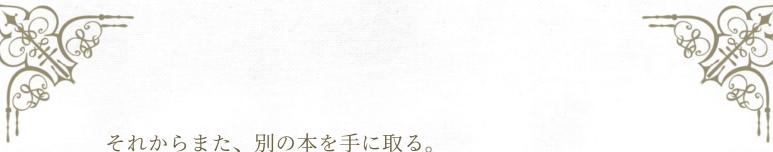
だから、私たちはおそれられている? 先生はそこまで話してくれなかった。

「流れ星に願えば、素敵な魔法を授かれるかな」

そんな子どもじみたことを考えてしまうほどには、魔女に なることに対して不安を感じてしまった。







一人の少年が画家になるために奔走する小説で、スミレの ことを思い出した。

欲しいものを聞かれて真っ先に画材をいうなんて、それほ どまでに絵を描くことがすきなのだろうか。

私はずっと勉強ばかりしてきたから、そういう趣味のよう なものはなかった。

どんな絵を描くのかな。

風景?人物?抽象画?

描いた絵を見てみたいと思ったけれど、扉を開けてくれな い彼にその願いを伝えてもいいのだろうか。

しばらく小説を読み、お昼になるころ下へおりた。



